

# シンポジウム

---

## 小児リハビリテーションにおけるメタバースの可能性

### —「つながり」が拓くあたらしい社会参加—

三重大学医学部付属病院

リハビリテーション部

作業療法士

長谷川陽子

現在、メタバースは教育や医療の現場に浸透してきています。身体的機能や免疫抑制により外出が制限される小児リハビリテーションにおいて、子どもたちのQOLを彩る「あたらしい居場所」となる可能性を秘めています。

メタバースの特徴は、移動の制約がないこと、「アバター」を使うことで外見が自由になることにあります。重症心身障害児や小児がん患者にとって、自宅や病院にいながら他者と交流できる環境は、あたらしい社会参加の場となります。昨年、当院では「小児がんリハビリテーションフォーラム」をメタバース上で開催し、小児がん患者の家族や医療従事者が一つの空間を共有しました。小児がんリハビリテーションについての情報伝達に留まらず、アバターを介した自由な交流が見られました。こうした機会は、仮想空間が社会参加の場となり得ることを示唆しています。

没入感のある立体的な空間での体験は、単なる映像を超えた刺激となり、病室や在宅で閉ざされがちな子どもたちの世界を広げてくれます。障害や病気により「体験することが難しいイベント」を可能にする場所は、子どもたちに、新しいことを体験する機会を提供するものです。本講演では、実践を通じて見えてきた、子どもたちの可能性を拓くための新たな社会参加を提案したいと思います。

---